

彙報

平成 20 (2008) 年度 海港都市研究センターの活動

平成 20 (2008) 年度の神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター（以下、「海港センター」と省略）は、昨年度から引き続いて講義・演習やプログラムを実施するとともに、文科省・大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話を核とする人文学教育」と協力して、教員・院生が集まって海港都市に関する研究会を組織・運営するなど、研究面の拡充を図った。また、附属図書館所蔵の資料をオーストラリアで紹介し、図書館と協議して資料情報データベースの充実を図るなど、資料情報の発信も積極的におこなった年度となった。

(1) 人文学研究科共通科目の実施状況

①海港都市研究<前期>

身近な「海港都市・神戸」をフィールドとして学際的に分析する手法、ならびに国際的な視野で研究を展開する方法を学ぶことを目的とした講義を実施した。神戸が海港都市として成立する歴史的淵源、さらに欧米系（ユダヤ人を含む）、韓国・朝鮮系、中国系、インド系の人たちとの交流が織りなす明治期以降の神戸と、そこで育まれた文化や社会の独創性について、リレー形式で開講した。「海港都市」を基点として学際的・国際的な視点から分析することの学問的意義について、大学院生に伝えることができた。くわえて、神戸港湾事務所の協力をえて、測量船を用いた神戸港内のフィールドワークを実施した。

②海港都市研究交流演習(海港都市研究交流企画演習) <後期>

大学院生が専門分野の枠を越えて横断的に議論するなかで、自らの研究を学際的・国際的な視点から見つ

め直し、同時に研究の意義を有効にアピールする能力を養うことを目的として開講した。なお、これは 11 月に韓国海洋大学で開催した国際学術シンポジウム(2)－①の準備報告会も兼ねた。演習では、事前に公募した報告予定者（研究員・大学院生）が、自身の研究テーマを「海港都市」もしくは「異文化接触」というキーワードに引きつけて考え、口頭でのプレゼンテーションを行った。また、今年からあらたに受講者も自身の報告を行い、専攻を問わず集まった教員・受講者と相互に議論した。参加した大学院生からは、昨年度同様、専門分野外の研究を聞くことに対する抵抗感や「海港都市」というテーマとの距離感に戸惑う声も聞かれたが、一方で「人文学の多様な研究手法を知ることができた」「専攻とは異なる角度からの質問に答えることで研究の幅が広がった」といった意見も多く、本演習の高い教育効果を再確認した。ただ、公募から大会報告までの準備期間が短く、十分な準備ができなかったとの声も聞かれた。昨年度の反省を受けて、今年度は 6 月上旬に公募し、7 月上旬に報告者を選定するなど早めに対応したが、来年度はそれぞれ一月早めて準備期間を確保する必要がある。

(2) 学際的かつ国際的な研究交流

①第 4 回 海港都市国際学術研究交流会「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」

平成 20 年 11 月 26～28 日、韓国海洋大学校において、国際学術シンポジウム「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」を開催した。これは、「海港都市」を多角的に考察するために、国境を越えた研究者同士の意見交換と、大学院生同士による研究交流を目的とするもので、今回で 4 度目となる国際学術シンポジ

ウムである。今年度は、海港センターと韓国海洋大学の共催で、これに中山大學、台湾大學、木浦大學校が参加して開催した。

シンポジウムは、鄭文洙氏（韓国海洋大學校國際海洋問題研究所・所長）「バルト海地域の形成と海港都市ネットワーク」、葉國良氏（台灣大學文學院・院長）「読韓儒丁茶山礼学者作的一些思考」、真下裕之氏（神戸大學大学院人文学研究科）「インド洋海域史における海港都市」の基調講演から始まった。その他の報告者、および報告題目は以下の通りである（敬称略）。

1 日目、袁丁（中山大）「海外華僑の送金広告」、崔鳳（中国海洋）「青島の韓国人」、金勝（韓国海洋）「韓末釜山地域の上水道施設現況」、洪錫俊（木浦）「鄭和の南海大遠征と東南アジアの海洋世界」、樋口大祐（神戸）「「壬辰倭乱」時期日本の言説空間と「朝鮮日々記」、住田哲郎（神戸）「受身表現のイメージスキーマー日本語・韓国語の対照研究」、濱田麻矢（神戸）「植民地朝鮮人の語られ方—満州、日本から見る—」、金貞蘭（神戸院生）「開港期釜山港に於ける朝鮮牛の輸出と「輸出牛検疫所」の設置」、梁美淑（韓国海洋院生）「開港以後釜山地域遊郭の流入過程と1910年代における遊郭現況」、金潤換（神戸研究生）「開港期釜山に於ける大谷派東本願寺に関する研究」。

2 日目、金玄（神戸院生）「植民地朝鮮と多木久米次郎—朝鮮に於ける経営基盤を中心に—」、張伝宇（中山院生）「抗日戦争および太平洋戦争時代の神戸華僑」、杉本宗子（神戸院生）「第二帝政期のフランス植民地政策と海軍」、大東敬典（神戸院生）「バンダレ・アッパーズのイギリス東インド会社商館とブローカー」、橋本寛子（神戸院生）「司馬江漢の西洋画法による日本風景画について」、安永幸史（神戸院生）「幕末浮世絵における西洋版画の受容—国芳を中心に—」、井上舞（神戸院生）「14世紀の播磨における「新羅」イメージ—寺社縁起を通して—」、李相美（台湾研究員）「台湾・韓国尊公儀式的交流現況」。

参加者は、両日とも50名前後であった。会の最後



国際學術研究交流会「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」
(2008年11月28日)

には、大会テーマや報告の方法などについて、より統一のとれたかたちで周到な準備を進めていくことの必要性が指摘され、来年度に神戸で開催する予定である第5回大会にむけての課題が確認された。シンポジウムとあわせて、釜山近代博物館、竜頭山公園、慶州地域（佛国寺・石窟庵）を巡検した。なお、本シンポジウムにおける鄭文洙氏・金勝氏（ともに韓国海洋大學校）の研究報告、ならびに神戸大学院生の研究報告の一部は、紀要『海港都市研究』（4号）に掲載した。

平成21年1月15日に開催した反省会では、「質問時間が確保できなかった」、「学生同士の交流の場が少なかった」、「シンポジウムの会場となる地域の歴史や現状を事前に学習する場をもうける必要がある」などの意見が出された。また、大学院生の教育的側面を重視する神戸大学と、研究大会としての側面を重視する他大学との間に若干のズレが見受けられるため、この点を来年度の神戸シンポジウムにむけて早急に調整する必要がある。

②海港都市 colloquium (コロキウム)

国内外の研究者が、より広い視野で海港都市・異文化接触について考え、相互に意見を交換する場として、神戸大学において「海港都市 colloquium」を計4回開催した。

・第5回 平成20年7月8日(人文学研究科・学生ホール)

報告者：崔鳳（中国海洋大學）「中国におけるグローバ

ル化と社会構造の転換」

・第6回 平成20年11月22日「孫文・地域社会・知識システム」(瀧川記念学術交流会館)

報告者:呉景平(復旦大学歴史系)「孫文と上海金融界」、何文平(中山大学歴史系)「中華民国初期の革命派による広東社会改造と地方エリート」、潘光哲(台湾中央研究院近代史研究所)「孫文の次植民地の想像」。

・第7回 平成21年3月8日「モダニティーの多元性—東アジアの視点から—」(瀧川記念学術交流会館)

報告者:徐興慶(台湾大学日本語文学系)「近代性をめぐる東アジアの知識人」、劉昶(華東師範大学歴史系)「中国現代化の複数性をめぐる歴史アプローチ」。

概要:東アジアが19世紀以後、欧米から導入したモダニティー(近代性)の知的資源は、東アジアがそれまで形成してきた社会システムや思想体系を大きく変容させると同時に、欧米が経験しなかったような新しいタイプのモダニティーを生み出すことにもなった。本会では、東アジアの視点からそうしたモダニティーの新しい可能性を探った。

・第8回 平成21年3月9日「島嶼と異文化接触」(瀧川記念学術交流会館)

報告者:Rosa Caroli(Ca' Foscari University of Venice, Faculty of Foreign Languages and Literature, Department of East Asian Studies)「琉球の文化と江戸時代の日本によるその政治的利用」、包偉民(浙江大学歴史系)「舟山群島:中外文化交流の焦点—「島嶼と異文化の接触」の研究事例の試論—」、高山博(東京大学大学院人文社会科学系研究科教授)「中世シチリアの「宗教的寛容」—ノルマン君主支配下のムスリム—」。

概要:清朝と日本の影響を受けながら独自の文化を発展させた近世琉球王国、ラテン・ビザンツ・アラブ文化が融合した中世シチリア、日本と中国の交易ルート上に位置づく舟山群島についての研究報告をおこない、多文化の境界に位置する島に見る、複数文化の共存・融合・対立の諸相について考えた。また、これらの報告に学生がコメントを付すことで、研究者と学生の相

互交流を図った。

③第4回 資料収集・研究交流会

平成21年3月3日～10日、神戸大学において、海港都市研究に関心を持つ若手研究者を対象として、日本において海港都市関連資料を収集するための補助を行う「資料収集・研究交流会」を開催した。海外拠点大学から大学院生5名を招聘し、彼らが行う海港都市に関する資料の調査・収集を援助した。招聘した大学院生は下記の通り。李丹(中国中山大学)、邵麗(中国海洋大学)、韓賢石(韓国海洋大学校)、李光一(木浦大学校)、欧秋芬(台湾大学)。作業の補佐には、神戸大学の大学院生5名があたった。補佐は、それぞれ項巧鋒(東洋史学)、権京仙(社会学)、吉原大志(日本史学)、崔紅梅(西洋史学)、小笠原淳(中国文学)が担当した。



資料収集・研究交流会(2009年3月4日)

④海港都市史料学にかかわる研究交流

・ **Discovering Histories of Foreign Communities in Japan: Research, Archives and Special Collections** (National Library of Australia)

平成20年12月1～2日、オーストラリア国立図書館(キャンベラ)において、日本の外国人コミュニティに関する歴史資料ワークショップが開催された。各国から研究者が招聘され、神戸・横浜をはじめとする外国人居留地や華僑に関わる歴史資料について、日豪の

アーカイブ制度の違いもふまえて議論した。海港センターからは、添田仁が「神戸大学附属図書館所蔵コレクション「神戸開港文書」にみる神戸居留地・雑居地社会の諸相」と題する研究報告をおこなった。これらの成果は、紀要『海港都市研究』（特別号）に掲載する予定である。

・神戸大学附属社会系図書館所蔵「神戸開港文書」の閲覧・見学会

平成21年3月4日、神戸大学附属社会系図書館所蔵「神戸開港文書」の閲覧をおこなった。同史料は、開港期神戸の港湾・都市行政の記録であり、古文書と英文が混在する稀有な史料群である。日本史研究者のみならず、西洋史・英米文学の研究者や留学生とともに閲覧し、今後の整理や活用の方向性をさぐった。

⑤学際的な研究会

若手教員・大学院生が集まって「海域アジア史研究会」を組織し、海港都市研究にかかわる洋書の翻訳作業を進めている（5/26、6/3、6/17、8/27、10/1、11/7、12/19、1/9、2/6、3/13）。また「兵庫津・神戸研究会」を組織し、兵庫津や神戸を中心とした海港都市にかかわる研究報告会やフィールドワーク、読書会などを開催している（12/18、1/30、3/4）。

（3）研究成果の発信

・紀要『海港都市研究』の発行

平成21年3月、海港センター紀要『海港都市研究』（4号）を発行した。第4回海港都市国際学術研究交流会「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」での鄭文洙氏の基調講演、金勝氏（ともに韓国海洋大学校）の研究論文を収録した。加えて同会での神戸大学院生の研究論文6本を収録した。さらに、投稿論文として陳博翼氏（北京大学）の論考、また研究ノートとして横田きよ子氏の論考をそれぞれ収録した。

編集委員の転任にともない、あらたに添田仁が委員にくわわった。なお、編集作業については、石井大輔・小笠原淳・麻植義晴が担当した。

・海港都市関係資料のデジタルデータ化

平成20年11月6日、海港センターが把握している海港都市関係資料のデジタルデータ化について、附属図書館との間で協議をおこなった。その場で、海港センターが附属図書館のデータベースを活用して関係資料をアップしていくことについて了解が得られ、今後の公開促進にむけて両者が協力していくことが確認された。現在、「上海」「上海週報」のデジタルデータ化が進められている。

（文責：添田仁）